

# 人間・植物関係学の成立と発展 -あたりまえの関係を科学する-

松尾英輔

前人間・植物関係学会会長

## The Foundation and Development of the Japanese Society of People-Plant Relationships - The science of the daily concern with plants -

Eisuke MATSUO

*Former President of the Japanese Society of People-plant Relationships*

**Keywords :** horticultural well-being, Plants in daily life, type of behavior

園芸福祉, 人と植物とのかかわり, 行動類型, 日常生活

皆さん、おはようございます。昨日と打ってかわった悪天候で大変ですが、部屋の中で勉強するにはかえって好都合かと思えます。しばらくお付き合いいただければありがたく思います。

今年は、人間・植物関係学会が発足してちょうど10年の区切りとなります。そこで、過去から未来へつながるべき人間・植物関係学をどう考えればいいのかという問題も含めまして、今日は本学会およびこれに関連する分野の動向を紹介したいと思います。

### 1. なぜ人と植物とのかかわりに注目するか

#### 1) 植物とのかかわりは身近で日常的

(まず、人と植物とのかかわりを示すスライド約30枚を紹介。)

写真(第1図)にみられるような笑顔が出る、というのが植物あるいは動物、いわゆる生きものとのかかわりの中で期待される一つの効果です。笑顔が出るということはしあわせ、あるいは幸福であること、すなわち、心も体も健康であることを意味します。このような笑顔を、植物とのかかわりの中でどのように導き出していか。これが本分野を学ぶ究極的なねらいではないかと思えます。



第1図. 植物を育てた子どもたちの笑顔. 写真提供: D. Reif博士.

人と植物とがかかわる場面は写真で紹介した例に限られません。第1表には、実物とかかわる例をまとめてみました。しかし実物以外の植物とかかわる例もたくさんあります。ショーウィンドウやお墓などで見かける模造花・模造植物(イミテーション植物)の使用はその一つですし、象徴的に、デザイン、言葉、イメージなどの形でかかわっている例も多くあります(第2表)。

2011年2月22日受付。

本稿は、2010年5月23日に行われた人間・植物関係学会創立10周年(2010年)大会における講演のテープ起こし原稿をもとに、演者が手を加えたものである。

第1表. 暮らしのなかにみる植物とのかかわりの事例.

<p>&lt;生きて成長している植物の例&gt;</p> <p>(1)活動: 庭いじり, 鉢物栽培, 地域の公園・花壇・街路樹の手入れ, 同好会・愛好会などのグループ活動, 園芸療法, 花療法, 森林浴, 自然探索, 盆栽・盆景・ペット植物づくりなど</p> <p>(2)場所: 室内, アトリウム, 窓辺, 庭, 花壇, 菜園, 家の周り, ベランダ, 屋上, 壁面, 市民農園, 学校農園, 福祉施設, 病院, 田畑, 道路沿い, 河川敷, 緑地, 公園, その他公共空間, 里山など</p> <p>(3)産物: 野菜, くだもの, 薬草, 茶やハーブなど嗜好品, 花・庭木などの観賞植物, 街路樹, これらで形づくられる景観(室内, 庭, 花壇, 公園など), 盆栽, 盆景, ペット植物, 神の依り代</p> <p>&lt;生きた植物/死んだ植物の例&gt;</p> <p>(1)活動 飲食, 投薬・治療, 療法, 装飾, 鑑賞・観賞, 製作・建築(住宅の柱, 床, 天井, 門扉, 家具・調度品, 器, 各種用具, 型枠, 下駄, 装飾品, 畳・ござ・座布団, 衣類, 蓑・笠, 蓑簾), 屋根葺き(ススキ, ヨシ, 麦わら), 描画, 造形・制作(彫り物, 植物工芸), 染色(繊維, 食べもの), 遊び, 供花(仏壇, 神社・神棚, 墓, 祠, 慰霊式, 追悼式, 供養, 事故現場など) 包装(竹の皮, 樹皮, 稲藁, 麦藁)</p> <p>(2)植物を用いるあるいは対象とする場面 節季行事, 宗教的諸行事(恒例行事, 神事でのお祓い, 供養, 祈願など), 縁起木や禁忌(室内や庭での利用や植え込み), 集落・学校・家庭などのシンボルツリー, 神の依り代, 個人の記念すべき出来事での花の贈答, 〇〇忌, 家庭の室内・室外の装飾, 催し物会場などに飾る花や盆栽, まつりや展示会などのさまざまなイベント, 各種の娯楽活動(花見, 鑑賞会, 果物狩り, 紅葉り, いも掘りなど), 料理, 料理の添え物, 食べ物の包装(カキ, カシワ, ゲットウ, サクラ, 笹, サルトリイバラ, ショウガ, ハラン, ホオノキ, マコモ, ミョウガなどの葉, 竹の皮, 経木, 稲藁), 薬湯(ショウガ, ショウブ, ナンテン, ハーブ類, マツ, みかん類, ヨモギなど)</p> <p>(3)植物を用いた作品・製品 飲食物・薬草(食物, 菓子, つまもの, 添え物, 装身具類(リース, 首飾り, 帽子, 履物など) 植物工芸品(花束, 生け花, フラワーアレンジメント, ブーケ, 押し花, におい袋, 草木染, 花絵, コサージュ, リース, 木工品, 籐製品, 竹製品, 蔓植物製品など) 旗竿</p>
---

松尾(2005)に補足し改変した.

第2表. 植物との象徴的なかかわりの例.

<p>1. デザイン・マーク(形, 模様) 装飾, 修景 デザイン(写真・絵模様, 彫り物の形で): 美術工芸品(絵画, 彫刻, 織物など), 家具・調度品(箆筒, 文箱, 小箱など), 装飾品(模, 屏風, 掛け軸, 巻物など), カーテン, 衣装, 装身具, 台所用品, 団扇・扇子, その他日用品, 切手・はがき, 貨幣, カレンダー, 包装紙, ダンボール, 書籍・雑誌 建物の壁・天井・欄間, 舞台幕, 床, トイレ, ごみ箱, 門扉, 鬼瓦 看板・広告類, 観光案内板, 旗・幟, 建物外壁, よう壁(鉄道, 道路, 地下道), 歩道敷, 橋の欄干, 工事現場, マンホールの蓋, 車体・機体 若葉マーク, 双葉マーク, シルバーマーク, もみじマーク</p> <p>2. シンボル 紋章: 家紋, 寺社紋, 教会紋, 校章・学章, 社章, 駅章, 自治体章など シンボル: 国旗, 国花, 自治体の花・木, 市町村の花・木, 標識(高速道沿いの市町村境など)</p> <p>3. 言葉 (イメージ, 連想) たとえ・諺(文学, 日常生活, 新聞・雑誌), 名前(地名, 人名, 色名, 施設名ほか), 花言葉, 生物季節・季語, 誕生花 厄除け・魔除け, 縁起木, 禁忌植物(植え込み, 見舞い), シンボルツリー</p> <p>4. 遊び(花札, 花合わせ, 花占い) (図柄はデザインでもある)</p>
--

松尾(2002・2003)を改変し補足した.

デザインとして用いられる例としては, 身近なところでは, 衣装, 包装紙, カーテン, 壁紙, 絨毯などに, デザイン化された植物を見ることができます。家具・調度品のデザインにも植物のデザインは使われています。歩道や橋の欄干などで植物を用いたデザインを見ることがあります。

家や自治体のシンボルとして, 家紋や寺社紋, 都道府県の紋章や校章・社章に見かけますし, 国や自治体の木, 花などもあります。

言葉で表現されるものとしては, ことわざ・たとえ, 俳句の季語, 生物季節, 花言葉などが挙げられます。また, そのイメージを表現するものとして, 人名をはじめとして, さまざまな名前として使われます。たとえば, 色名, 地名, 施設名, 公園名, クラス名, 宿泊施設の部屋名など, 実にさまざまです。

花合わせ, 花札のように植物の図柄がある素材を使っての遊びもあります。

以上のように, 暮らしの場における植物とのかかわりの事例を紹介しました。スライドや表をご覧になった皆さんは, なんだ, そんなのは何処にでもある, 普通にみかける光景ではないか, と感じられたのではないのでしょうか。実際, 少しも珍しいものではありません。実はそのような, 日常生活の中であたりまえの植物とのかかわり, もっと広くいうと動物をも含めた生きものとのかかわり, さらに拡大して自然とのかかわりを見つめなおしながら, そういえばそういう関係もあるね, いったいどういう風に私たちに影響をもたらしているのだろうか, もし良い効果をもたらすのだったらそれを積極的に推進していこう, 悪かったらできるだけそれを避ける方向にいかねばならないのではないか, というようなことを考えるところに, 人間・植物関係学の原点があると思います。

人間・植物関係分野で仕事をするにあたって心すべきことは, 「当たり前なことについては, それが当たり前だからこそ関心も持たず記録も残しません。しかし文化というものはそうした当たり前のことで成り立っています。」(波平, 2001)という言葉です。あたりまえだから気を使わないのではなく, より注意を払い, 私たちの身近にどのような植物とのかかわりがあるかを認識することが大切なのです。

このように, 実物, 非実物を含めて, さまざまな形で植物とのかかわりはきわめて身近な存在でありながら, 私たちは意外とそのことを意識していません。場合によってはそういう存在すら忘れていくというのが私たちの実態なのです。これは, 空気存在を私たちが忘れていくことと同じようなものです。このような実態に私たち自身が気付くことが大切なのです。

## 2) なぜ植物とのかかわりに注目するか

では, そういうことを考えることが, なぜ今注目されているのか, なぜ必要なのか, なぜ人間・植物関係

を学ぶ私たちがそういうことを啓発していかなければならないのか、ということになります。なぜかといいますと、先ほど申しましたように、私たちが人間として、人間らしさを実感しながら生きているときには、しあわせ、幸福を示す笑みがにじみ出てきます。現代ではそのような笑顔が本当に出てきているのか、笑顔で過ごせる状態にあるか、というと必ずしもそうではない現実があるからです。

特に今、世界中で大きな話題になっているのは、環境の問題ですが、大きな要因の一つには森林がなくなっていることが挙げられます。この問題は、私たち個人のレベルではなく、地球レベルでものを考えていかななくてはならない、ということを示しております。なぜそうやってきたのでしょうか。地球資源の利用技術、つまり、資源をどう利用するかという技術の発展が文明の発展、文化の発展と同義に捉えられてきたところにあると考えられます。そこで中心になってきた考え方は何かというと、1)いかにその資源を自分のもの、人間のものにするか、2)そうして得たものを別な形のものに変えて利用していくか、ということです。それによって私たちはより快適な生活、より安易な生活を求めてきたのです。

## 2. 獵る行動・思想と育てる行動・思想

それでいいのかという決してそうではありません。前述の状態が行過ぎた結果、地球全体がだめになって来つつあります。人間の存在自体が脅かされる状態になってきています。これでは笑顔どころではありません。では、そのような危機を防ぐ、あるいはストップをかけ、おかしな方向に來たのをもとに戻すにはどうすればよいか、もっと積極的な意味で、地球全体がさらに豊かになっていくためにはどうすればいいのでしょうか。

これを実現するために欠けていたのは何かというと、端的な例を挙げれば、森を切ったら森を育てなければならぬという考え方です。単に植えておけば済むという問題ではありません。森をあるいは木を育てる、いわゆる世話・手入れをして、そして木々が何百年もかけて成育するのをじっと待つ、そういう行動と考え方が必要になってきます。これを私は育てる行動・思想と呼んでおりますが、現代ではその考え方が、木を切って利用するという行動と考え方(私はこれを獵る行動・思想と呼んでおります。)と比べると非常に弱くなってきています。いいかえると、育てる行動・思想が軽視され、薄弱なものになっています。そこに問題があるのです。

どうしてそういうことを考えていかなければならないのでしょうか。私たち人類だけでなく、すべての生きものがいかに子孫を残すか、子孫を繁栄させるか、

つまり種属維持ということを中心に生命活動を営んでいます。そのときに必要になるのが何かというと、特に高等動物の場合、一つは個体維持の本能に基づいて出てくるものですが、まず自分が生きるためにさまざまな情報とか物を手に入れる行動であり、もう一つは種属維持の本能に基づくもので、子孫を残すために子どもを育てる(子そだて)行動です。そのような二つの本能的な行動がヒトから人間という生きものに進化したときに、どう変わってきたかを示したのが第2図です。

欲求	行動類型		
本能的 (動物的)	(情報を知覚する)(ものを獲得する)		
	手に入れる	そだてる	
ヒトから人間への進化	↓	↓	
創造的 (人間的)	獵る	育てる	
行為	狩る	造る	そだてる
具体例	五感によるかかわり 買い物、収穫 狩猟、情報入手 スポーツ、娯楽	加工、製作 制作、発想 工夫、作文 思考	子育て、教育 後継者養成 植物栽培 動物飼育

第2図. ヒト(本能的存在)から人間(創造的存在)に至る行動類型の進化. 松尾(1998)を一部改変した。

ヒトから人間に進化するにあたって、「手に入れる」行動を、人間独特の、特に発達した大脳を働かせて(創造的に)「獵る」行動へと進化させました。「子そだて」(そだてる)行動は、単に子どもだけではなく、動物や植物など人以外の生きものをも含めて世話をし、手入れをするという「育てる」という創造的行動に進化しました。私たち人類は、これらの両行動のいずれか一方を欠いてしまえば生き残ることができません。つまり、理想的な形としては、両行動をバランスよくあわせもってはいはじめて、人間として生きているといえるでしょう。両行動のバランスがとれず、偏っていたのではやはり本当の意味での人間として生きているとはいえないのではないのでしょうか。

このような見方で私たち自身をみたときに、どう鼻屨(ひいき)目にみても、育てる行動・思想が希薄になっているのが現代人の実態のように思われます。それはどういうところからきているのでしょうか。

これを考えるために、「獵る」行動と「育てる」行動の特徴という面からみてみることにしましょう(第3表)。まず、獵るときには生きものも生きていないものも対象となりますが、育てるときには対象が生きものであるものでなければなりません。次にそのかかわり方は、対象を獵るときには自分主体の(主体的)考え方で、自分がどうするかという態度で臨みますが、育てる場合には、対象をよく観察しながら、その成長をいかに支援できるかという(客観的)姿勢で臨みます。かかわり方の時間の長短をみれば、獵るほうは短期間あるいは一時的ですみますが、育てるほうは、対象自体が命を

もち時間をかけて成長する生きものですから時間がかかり、長期的に継続的にかかわることになります。したがって、目的達成という点からいえば、狩ることは手っ取り早くできるのに対して、育てることは時間がかかって我慢や忍耐を要することになります。

第3表. 狩る行動と育てる行動の特徴の比較.

項目	狩る	育てる
行為	狩る・育てる	そだてる
行動の対象	生きもの・非生きもの	生きもの
かかわり方	主体的・意図的 計画的・目的的	客観的・支援的 養育的・対象任せ
接触	一時的・短期間	継続的・長期間
目的達成	手っ取り早い	時間がかかる 忍耐を要する 我慢を強いられる
作品	意図するもの	思い通りにならない
難易性	簡単・容易	むずかしい
仕事としての かかわり方	断片的・分業的	一体的・総合的 体系的
取り扱い	もの(物質)扱い	命あるもの
効率性	効率的	非効率的
経済的	有利	不利
態度	利己的 自分中心	利他的(社会的) 相手中心

松尾(2009)を一部改変した。

植物とのかかわりを経済的な側面からみると、育てることよりも狩ることのほうが圧倒的に有利です。みかんを考えてみましょう。みかんを育てる、つまり手入れをして結実させるのには大変な労力と時間がかかります。しかも必ずしも売りものになる、あるいは、みかん狩りの対象にできるみかんが実るとはかぎりません。しかしながら、みかん狩りという狩る行動では、金さえ払えば簡単にみかんを収穫して食べることができます。いってみれば、狩る行動というのは、いいとこどりのつまみ食いのようなものです。

このように、生きものを育てるといのは時間がかかり、予測どおりに生きものは成長してくれませんが、確実に商品になるとは限りません。ですから、狩ることに比べて、育てることは非効率的ですし、経済的には不利なのです。

第2図でもわかるように、これらの「狩る」行動と「育てる」行動とは、相反するようでありながら、両者が相補いながら人間という私たちの存在を可能にしているのです。したがって、それらの相反するように見える特徴は私たちの暮らしや性格の中にもいろいろな形で出てきます。たとえば、一見のんびり屋のようでいてせっかちである、大まかなようだが細かいところがある、ずぼらだが几帳面なところがある、行き当たりばったりのように見えるが計画的である、時間にルーズに見えるのに意外に厳しい、辛抱強いようでありな

が短気である、びっくりするほど人の世話をよくするが利己的などころもある、などの例がみられます。明らかに、育てる行動・思想と狩る行動・思想は相反するように思われる側面をみせつつ相補いながら私たちの中に存在していることがわかります。

### 3. 日常生活にあふれる狩る行動・思想

先ほど申しました文明の発展が意味するものは、人間の利便性とか快適性を求めるために資源を利用・活用するというような狩る行動・思想が原動力になっていったことでしょうか。それは人間の都合ばかりしか考えていない、資源・自然のつまみ食いだったといえます。この傾向は弥生時代頃から特に顕著になったとみられています。縄文時代はつまみ食いであったにしても、必要なものしか殺さない、必要なものしか採取しない、そういう時代だったといわれます(タツジ, 2002)。

いずれにしても森=植物は人間に非常に大きな恩恵をもたらしていたのですが、その大切な森を消費したために文明が減じたことはさまざまな資料で紹介されています(平野, 1996; 安田, 1996 など)。ギリシャ文明、メソポタミア文明はよく知られた例ですが、安田喜憲氏(1996)によると、地中海周辺の文明もイースター島の文明も森を利用し尽くして滅びました。時代を下って中世以降では、森を切ったことがヨーロッパからアメリカへの移住を促したのだそうです。

これは一つには人間が自然の循環の中からはみ出してきたこと、言葉を換えれば、人間が環境に手を加えてある程度支配するようになったというところに原因があるといわれています。その中でも特に、消費という、資源をつまみ食いする方向だけに進んでいったところに問題があります。何百年かけても森を育成するというようなものの考え方を、最初からやっていたら、上に述べたような文明が減びるようなことはおそろくなかったでしょう。安田氏(1996)は次のようにいっておられます。

「人間の本当の幸福は人間だけが元気ででは得られないのである。本当の幸福は、人間も、森も、森の中の動物たちも、(演者は植物も含めて考えています。)元気であることで得られることである。」

元気であるということは、健康であると言い換えてもいいのですが、このことを考えますと、人類の健康を守るためには地球の健康をどう守るか、というところに必然的につながっていかねばいけなくなります。これには、人間の暮らし、地球の健康に関係する植物に、私たちがどうかかわっているかを理解しておくことが欠かせない要件になってきます。

#### 4. 人間・植物関係学の考え方 人間・植物関係学とは何か

そこであらためて、人間・植物関係を学ぶにあたっては、どのような手順で見てゆけば取り付きやすく、理解しやすいのでしょうか。

まず、人間と植物とのかかわりの実際に目を向けること。つまり、私たちと植物との接点がどんなところにあるか、ということに目を向けることです。人と植物とのかかわりの例としては、具体的には、五感に触れる、五感で知覚する、四肢五体を使って働きかけるなど、ごく身近な例はたくさんあります。第1, 2表をみればわかるように、身の周りを振り返ってみれば、あれもそうだ、これもそうだ、というように、皆さんが日々の活動の中での植物との具体的なかかわりがみえてきます。

次に、そのかかわりがもたらす影響を探ることです。すなわち、それらのかかわりが私たち人間だけでなく、植物には、あるいは動物にはどういう影響を及ぼしているか、ということをも探る必要があります。その影響にはプラスもあればマイナスもあります。それらを明らかにし、プラスは活かす、マイナスはそれが起こらないようにしていくわけです。中にはプラスのようでマイナスをもたらしたり、マイナスのようでプラスをもたらしたりする例もあるでしょう。それはそれなりにきちんと明らかにして、そのプラスとマイナスをどう折り合わせるかも考えなければなりません。

さらにそれらの成果を、人そのもの、人とその周りの環境、さらには地球の環境、これらすべてが健康であるようにはどのように活かしていけばよいか、を目指すことが欠かせません。具体的な活動例は植物とのかかわりを楽しむことです。さらに広げて考えるならば、園芸療法を含めた園芸福祉活動、教育活動、社会活動などが挙げられましょう。

以上の三つの段階を踏まえながら、人と植物とのかかわりを研究し、教育し、そして応用していく学問が、人間・植物関係学であるということになりましょう。もっともらしく表現するとすれば、「人と植物とのかかわりに目を向け、そのかかわりの実態を認識し、そのかかわりが人間ならびに植物の双方、さらにはそれらを取り巻く環境(自然・文化・社会)にどのように影響しているかを明らかにし、その成果を人とその環境さらには地球環境の健康にどのように活かしてゆけばよいかを目指す学問である」ということになりましょう。

##### 1) 人と植物とのかかわりの変遷

そこで、人と植物とのかかわりはどう変遷してきたかを歴史的に概観してみたいと思います。

まず、有史以前からずっと人間は、植物の世界で生きてきました。食べもの、水、安全な隠れ家などを植物に提供してもらって(Lewis, 1996)暮らしていたの

です。植物から利益を手に入れるほうが圧倒的に多かったといえます(第3図)。つまり、植物のお蔭で生きてこられたともいえます。時代が下り、農耕が始まった頃にある程度植物の世話・手入れをするようになってきました。

有史以前	植物	➡	人	狩る
古代	植物	➡	人	狩る
		←		育てる
現代	植物	➡	人	狩る
		←		育てる
今後	植物	?	人	??

第3図. 人と植物とのかかわり方の変遷(模式図).

ところが現代は、植物を手に入れることも、植物の手入れ・世話することも、いずれも増大してきているのですが、特に手に入れるほうが圧倒的に大きくなっています。森林伐採はもっとも典型的な例かもしれません。そして遂に私たち人間はその生活を依拠する森林環境まで壊すようになってきています。こういう状態が続けば植物資源がなくなり、人類の滅亡につながる可能性がより確実なものになってきます。

では、将来はどうすればよいのでしょうか。当然のことですが、植物の手入れ・世話をして、植物が大きくなり、多くの生きものが生息できる環境をもった、健康な地球にすることです。

##### 2) 植物に生かされる私たち

先に第1, 2表に示したような事例をみますと、実物であるか非実物であるか問わず、私たちの毎日の生活は植物とのかかわりなしには成り立たないことがわかります。これらをもみても、“Without plants, we would not survive.” (Oregon Agriculture in the Classroom Foundation, 2010)。すなわち、人は植物なしには生きられないことがわかります。これがこの2010年奈良大会のキャッチフレーズである“*No Plant No Life*”ということです。

この際知っておかねばならないことは、“Plants would survive without people.” (植物は人がいなくても生きられる)ということです。つまり、私たちは全面的に植物に依存している存在であり、それだけ植物とのかかわりを大切にしなければならないことを示唆しているともいえます。

ところが、植物とのかかわりの事例を挙げてくださいますと、と促しますと、学生諸君ではせいぜい10例くらい挙げたら終わりです。実際は紙いっぱいになっても書ききれないくらいあるはずなのですが、そうはなりません。空気存在と同じように、あたりまえのこととして見逃してしまっているために、数え上げることができないのです。植物とのかかわりにはあまり気を配っていない、ということになります。これでは植物

とのかかわりの深さは理解できません。植物とのかかわりはどこにでもあり、実際にどうかかわりがあるかを改めて認識しておく必要があるのです。

### 3) 植物とのかかわりの影響

そういう植物とのかかわりが私たちにいったいどう影響を及ぼしているのでしょうか。まず、その影響がどこに現れてくるのかというと、まず身体や心でしょう。食べものは、身体の健康を維持するうえで欠かせませんし、活動のエネルギーも生み出してくれます。植物は心の食べものにもなります。緑の植物があると疲れた心を癒してくれます。植物を育てることによって、喜び、愉しみを得ることができます。身体を動かして体力の衰えを予防し、あるいは、体調を整える役割も果たしています。そのようにして産み出される心身の健康は、人とのつながりを円滑にします。すなわち、社会の健康にもつながってゆきます。つまり、社会環境に影響をもたらします。それが回り回って地球環境の健康そのものにも影響を及ぼしてくることになるのです。

もちろん、植物とのかかわりの影響にはプラスもありますし、マイナスもあります。マイナスを無視するわけにも行きませんので、重要なものをまとめておきましょう(第4表)。

第4表. 植物とのかかわりにみる主要なマイナス効果  
(人間にとって被害、害になる影響)。

種類	事例
アレルギー	花粉症(マツ, スギ, ヒノキ, ブタクサ, ヨモギなど) かぶれ(ハゼ, ウルシ, ギンナン, サトイモ, セロリ, ヤマノイモ, セイヨウサクラソウ, クレマチス, ノウ ゼンカズラなど)
中毒	有毒植物を食べて起こる(アサガオ, アジサイ, アセビ, オモト, キョウチクトウ, ケシ, ジギタリス, スイセン属, スズランなど)
傷害	棘のある葉, 茎による刺し傷(カンキツ類, ザクロ, ナツメ, バラなど) 鋭利な葉による切り傷(ススキ, レモングラスなど)
植物に寄ってくる 動物による被害	咬傷(マムシ, ムカデなど) 刺傷(アシナガバチ, スズメバチ, ミツバチ, イラガ, ドクガ, チャドクガなど)
その他	落葉・落花による樋や排水溝の詰まり, 落葉・ 落果を踏んで転倒 街路樹などの過繁茂による視界の遮断 根による道路, 舗道, 擁壁, 石垣の破壊

松尾(2005)より抜粋してまとめた。

そしてここではプラスの側面を見ていくことにします。いわゆるプラスの影響は一般に恩恵とか効用と呼ばれます。ここでは効用という表現をしておきましょう。効用は第5表に示すように七つに大別されます。

実際はそれらが単独に作用していることはほとんどありません。お互いにくっつき絡み合って作用しているというのが実際なのです。これらが総合的に作用しながら、私たちを癒し、私たちに喜び・愉しみ、そして、期待や希望も与えてくれるのです。もちろん、それが

第5表. 植物とのかかわりの効用。

- 1) 生産的効用  
植物とのかかわりの成果が生産物(野菜, 果物, 花, 薬草, 香草, 工芸作物のほかに, 生け花, 押し花, リース, ポプリなどの植物工芸品, 室内, 庭や公園, 緑地, 町並みなどの景観も含まれる)の形で私たちの手に入る
- 2) 経済的効用  
生産物を経済的に評価して得られる。農家はその収益で生計を営むが, アマチュアの場合には, 自家産品による節約ができる。快適環境の場所の不動産は高い。観光地や植物のイベントなどによる集客, 公園の一部を市民農園として賃貸するだけでなく維持管理費用を節約などがあげられる。
- 3) 心理的効用  
生産物を五感で知覚したとき, 植物の手入れをしたときに得られる快一不快, 沈静一昂揚, 好き一嫌いなどの情感だけでなく, 活動の成果を通して味わう達成感, 自信, 自己評価の高まり, 共同作業などによって得られる連帯感や共通の価値観などもその例といえる
- 4) 環境的効用  
そのような心理的反応を起こさせる環境を出現させることのほかに, 環境条件を緩和して暮らしやすくなる。温度や湿度変化の緩和, 防風, 防火, 遮光, 防音, 侵食防止, 小動物の生息地, 環境指標植物として活用など
- 5) 社会的効用  
生産物や活動そのものが人と人との交流の場やきっかけをつくり, 仲間づくりやまちづくりに発展する
- 6) 教育的効用  
子どもや素人に知識, 知恵, 思想など文化を伝え, 人間社会の一員として生きることを学び・教える。地球上の生物資源の持続性を確保するうえでも, このような「育てる」という発想が欠かせない。この発想は生きものを通してしか学ぶことができないので, 農耕・園芸の役割は大きい
- 7) 身体的効用  
生産物の一部が食べ物, 嗜好品, 薬用植物として, あるいは, 活動によって筋肉の衰えを防ぐ, 体調を維持するなど, 身体的機能を回復・維持・増強し, さらに, 心理的充足感を得て心の状態を安定化することが身体の調子を正常に保つ

松尾(2007)を一部改変。

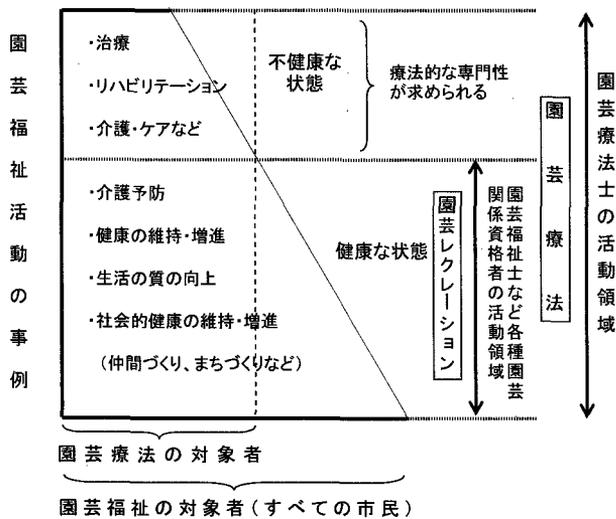
笑顔という形で表現されるわけですが、そのときには人間らしく生きている喜び、あるいは生きている実感、そういうものを感じているのです。演者はこれを人間的効用と呼んできました。

### 4) 園芸福祉 — 園芸療法的位置付け

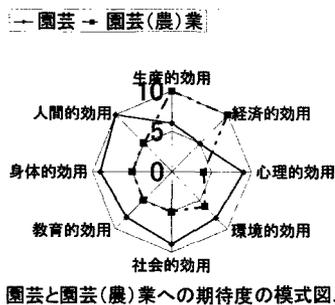
このようなしあわせ感を、植物を育てることを通して推進して行こうという考え方が生まれました。これが応用場面の一つで、園芸福祉と称されるものです(松尾, 2005)。園芸療法は、その園芸福祉分野の一つの領域であり、療法的なかわりを有する人々(たとえば、自分の力で園芸福祉を享受できない人々)を対象として、専門家が療法としての手続きを踏みながら彼らの園芸福祉を支援しようというものです(第4図)。

以上のような実情から考えますと、特に農業や園芸業という専門分野では、主に生産的効用と経済的効用に重点を置いているのに対して、いわゆるアマチュアの場合は、これらよりもむしろその他の効用にウェイトを置いているということになります(第5図)。

いずれにしても、このようなアマチュアにみる、人と植物とのかかわりに目が向けられるようになったのは、その産業的な側面だけでなく、生活面での役割に関心が向けられるようになったことを意味すると考えることができます。



第4図. 園芸を通しての福祉(園芸福祉)活動の内容：園芸療法と園芸レクリエーション(松尾, 2004 を改変)。



第5図. 農耕・園耕分野におけるプロ(破線)とアマチュア(実線)にみる効用への比重の置き方の違い(模式図)。

### 5. 人間・植物関係学の成立

そこで、人間・植物関係に関連する言葉がいつ出てきたかを探ってみました。アメリカでは、1970年代に People-Plant Relationship Committee という言葉が出てきております(Shauman, 2010)。その他に1979年には People-Plant view point (Lewis, 1979), 1989年に People/Plant Issues や People/Plant Interaction (Interdisciplinary Team of the Office of Consumer Horticulture, 1990)が出ています。

1990年にはアメリカで People-Plant Council (人間・植物協議会)という団体が結成されました。この団体は、バージニア州アーリントン(ワシントンDCに隣接)で1990年に「人間の暮らしと社会の発展に対する園芸の役割」を探るアメリカ国内の会議が開催された直後、参加者が中心になって組織したものです。その場で、人と植物との関係に関するシンポジウムを2年ごとに開催することを決定し、2010年までに10回の会議が開かれました(第6表)。

1992年のこの会議の案内には Relationships between people and plants, People-Plant Relationships などが出ています(Announcement of the National Symposium "People-Plant Relationships: Setting Research

Priorities", 1992)。なお、この会議は初めはアメリカ国内のシンポジウム(National Symposium)と位置付けられていました。しかし、外国からの参加者も多かったところから、第4回会議(1996年)からは国際シンポジウム(International Symposium)という名称に変わりました。この頃から、People-Plant Relationとか People-Plant Interaction という言葉が頻繁に使われるようになってきました。

この国際シンポジウムが、世界中で人間・植物関係への関心、あるいは研究を推進する大きな役割を果たしてきております。日本からも参加者がおり、上記のような国際的な動きを伝えました。と同時に、この会議の中心メンバーも来日し日本の各地を訪れて、講演会やシンポジウムを通して普及・啓発活動をするなど(第6図)、日本における人間・植物関係分野の研究・教育にも大きく貢献しました。

この間、1996年に行われた、テキサス州サンアントニオでの International People-Plant Symposium の折には、この国際会議を日本で開催してはどうかと打診されました。しかし、当時の日本では、とてもこの領域を取り上げる国際会議を開く情勢ではありませんでしたので、固辞せざるを得ませんでした。

第6表. 人間・植物シンポジウムの開催年、開催地とテーマ。

第1回	1990.4.米国バージニア州アーリントン	The role of horticulture in human well-being and social development (人間の幸福と社会の発展に対する園芸の役割)
第2回	1992.4.米国ニュージャージー州イストラザフォード	People-plant relationships: Setting research priorities (人間と植物との関係: 優先課題はなにか)
第3回	1994.3. 米国カリフォルニア州デービス	The healing dimensions of people-plant relations (人間と植物関係にみる癒しの効果)
第4回	1996.5. 米国テキサス州サンアントニオ	People-plant interactions in urban areas: A research and education symposium (都市域における人間と植物との関係)
第5回	1998.7. オーストラリア・シドニー	Towards a new millennium of people-plant relationships (来るべき2000年代における人間と植物との関係)
第6回	2000.7. 米国イリノイ州シカゴ	Interaction by design: Bringing people and plant together for health and well-being (デザイン: 植物と人間の健康・福祉を結ぶ)
第7回	2002.8. カナダ・トロント	Expanding roles for horticulture in improving human well-being and life quality (人間の幸福と生活の質の向上に対する園芸の役割の拡大)
第8回	2004.6.日本・淡路	Exploring the therapeutic power of flowers, greenery and nature (花と緑, そして自然の療法的力を探る)
第9回	2006.8.韓国・ソウル	Horticultural practices and therapy for human well-being (しあわせを目指した園芸の実践と園芸療法)
第10回	2010.8.カナダ・ノバスコシア	Digging deeper: Approaches to research in horticultural therapy and therapeutic horticulture (もっと理解を深めよう, 園芸療法, 療法的園芸の研究の深さと幅の広さ)

松尾(2005)に補足・改変した。

写真 No.	研究者名	年度	採用時の所属・職	研究課題名
①	D. Relf <sup>2</sup>	1992	バージニア工科・ 州立大学・准教授	(Study on the relationships between human and horticulture)
②	A. Lewis	1994	モートン植物園・ 上級研究員	Role of horticulture in the community
③	R. Ulrich	1997	テキサス A&M 大学・ 教授	Study on the psychological and physiological effects of plants on people and their application
④	M. Burchett	1998	シドニー工科大学・ 教授	Monitoring air pollution of our nearby environment
⑤	G. Groening	1999	ベルリン芸術大学・ 教授	Role of Kleingarten in education, culture and environment
⑥	D. Relf	2000	バージニア工科大学・ 教授	Horticultural therapy and horticultural well-being in relation to people- plant relationships
⑦	C. Shoemaker	2001	シカゴ植物園園芸 専門学校・校長	Research and development of methodology in people-plant relationships
⑧	V. Lohr	2004	ワシントン州立大学・ 教授	Exchange and analysis of psycho-physiological indices on the influence of people-plant relationships



第6図. 文部省招聘教授<sup>2</sup>と日本学術振興会外国人招へい研究者(短期)として来日した人間・植物関係分野の研究者たちと研究課題。

<sup>2</sup> 文部省招聘教授・鹿児島大学大学院農学研究科。その他は日本学術振興会外国人招へい研究者(短期)事業による招へい研究者である。

## 6. 日本における人間・植物関係分野の 成立と発展

そこで、日本ではどうだったかをみてみましょう。昔から文化人類学、民俗学、医学、薬学などの分野では人間・植物関係の話題を取り扱った研究がありました。そういう話題はそれぞれの分野で断片的に発表されています。けれども、そういう話題を人間全体の問題として捉え、そこに絞り込んだ話題をとりまとめようという考え方はあまりありませんでした。

そのような考え方を醸成するきっかけになったのは、一つには1970年代の公害問題があるようです。公害が告発された当時、どういう問題が出ていたかというと、まず一つは、都市の中の緑の喪失です。都市はコンクリート・ジャングル、アスファルト砂漠などとも呼ばれていました。これは都市の緑をどう回復するかという課題を産みだしました。そして、都市公園や

街路樹の整備など、都市緑化につながって行きました。

もう一つは、食べものの農業汚染です。「いったいどんな農業漬けの食べものを食わされているのかわからない。」という不安を都市の住民に抱かせることになりまして、菜園や市民農園などに対する彼らの関心を高めることになりました。

この頃から食べものや環境にかかわる植物は、単に農学の分野で生産、整備するという観点からだけではなく、他の分野との関連を考えて取り上げなければならぬ、というようになってきました。逆にいうと、人間というものを中心に置いて、さまざまな分野の研究・教育が統括的に捉えられなければならないというわけです。

たとえば園芸の領域ですが、私が学生であった1960年前後には、品質のよい、売れる商品をいかにたくさん生産するかが中心課題でした。もちろん、それが大切なことはいまでもありません。では生産は何のためにあるのかといえ、人間のためにあるわけです。

その人間のためには、単に肉体の食べものをつくり、金儲けすればよいというわけではありません。心の食べものをつくりだして活用することも欠かせません。

現実に都会では、食べるわけではない花を植木鉢で栽培することに夢中になっている人たちが当時もたくさんいました。これを売って金儲けができるわけではありません。それでも彼らは、嬉々としてその活動を楽しんでいるのです。1970年代になって、このような人たちがたくさんいることに気付いたとき、よい商品をつくり、経済的利益をあげることは異なる、園芸の違った側面があることに目を向ける必要があることを痛感しました。

その1970年代から、日本の農業は多くの試練をうけることになりました。その一つは、海外から安い農産物が輸入されることになり、生産物の経済的評価だけでは、日本農業は続けにくくなってきたのです。こうして、環境に果たす農業の役割が注目されるようになりました。1980年代後期になると、野菜類の輸入も増加してきました。ますます経済的評価一辺倒では農業は成り立たなくなっていくようです。

こうした中で、生活文化の中における植物とのかかわり、いいかえると、人と植物とのかかわりの役割が注目されるようになってきました。たとえば、園芸学会では日本で国際園芸学会議を開催することが1990年に決定され、そのモットーを“The beautification of life and its environment through horticultural science”とすることになりました。1991年には、社会園芸学という講義が鹿児島大学で開催されました(松尾, 1991b)(第7表)。

第7表. 四年制大学で開講された人間・植物関係分野に関連する授業科目(1980-1999)

授業科目名	単位数	開講初年 <sup>2</sup>	開講大学・学部
生活園芸Ⅰ	2	1988	恵泉女学園大学人文学部
生活園芸Ⅱ	2	1990	恵泉女学園大学人文学部
家庭園芸学	2	1990	武庫川女子大学
社会園芸学	2	1991	鹿児島大学農学部
家庭園芸の手引き	2	1992	武庫川女子大学
生活園芸Ⅱ	4	1992	恵泉女学園大学人文学部
都市園芸論	2	1995	東京農業大学農学部
生活園芸論	2	1995	東京農業大学農学部
社会園芸学	2	1995	九州大学農学部
園芸文化論	4	1996	恵泉女学園大学人文学部
生活と園芸	2	1997	玉川大学教育学部
社会園芸学	2	1997	放送大学
生活園芸学	2	1998	東京農業大学農学部
人間・植物影響学	2	1999	東京農業大学農学部
都市園芸学	2	1999	東京農業大学農学部
社会園芸学	2	1999	東京農業大学農学部
社会園芸学	2	1999	南九州大学園芸学部

松尾(2005)に補足・変更した。

<sup>2</sup> その後、閉講された科目もある。

さらに1990年代初めには、主にアメリカから園芸療法が導入され、注目されるようになりました。ここには農学分野においても、植物とかかわる人間を大きく取り上げる側面が明らかに現れてきます。ちょうどこの頃からアメリカのPeople-Plant Relationships, People-Plant Interactionの考え方が色濃く反映されてくるようになりました。1990年代の終わりから2000年代になって、園芸福祉や人間・植物関係という言葉が定着してくるようになります。

どんな言葉が実際に出てくるかといいますと、考古学の領域では1981年に「縄文時代の人間-植物関係-食料生産の出現過程」(西田, 1981)、1993年には「用材から見た人間・植物関係史」(山田, 1993)というタイトルで使われています。農学領域では、1990年園芸関係の雑誌に「人間と植物との関係」(松尾, 1990a), 「人と植物との関係」(松尾, 1990b), 「人間と植物とのかかわり」(松尾, 1990c)という言葉がみられます。1991年にはPeople-Plant Councilが和訳された言葉「人間・植物協議会」が出てきます(松尾, 1991a)。「園芸と人との相互作用」という言葉もみられるようになり、その後1998年に「人間・植物関係分野」という領域が東京農業大学の農学科にでき、「人間・植物影響学」という授業科目が東京農業大学で開講されました(第7表)。

1990年代の半ばくらいから園芸療法への関心が急速に高まってきました(松尾, 1998)。園芸療法に関する話題が多かったせいもあるのでしょうか、人間・植物国際シンポジウムへの日本人の参加も増えました。このような動きを受けて、1990年代後半になりますと、園芸療法士の資格化を要請する声も聞かれるようになりました。そして、そういう流れの中で、園芸療法関係者の間に、学会を立ち上げようという動きが出てきました。

## 7. 人間・植物関係学会の発足

それを受けて、1999年に園芸療法関係者の間で協議が行われました。園芸療法学会を立ち上げるかどうか、というわけです。そのときさまざまな論議がありましたが、園芸療法を考えるうえでは、人間と植物との間にどのような関係があるから園芸療法として活用できるのか、をまずきっちりと把握すべきではないか、そのためには、まず関係者が人と植物との関係を学び、共有することが先決であろう、という結論になりました。つまり、園芸療法に関する学会の設立はしばらく先の課題として、まず「人と植物の関係学会」というような名前の団体を組織してはどうかということになったのです。なぜ人と植物の関係学会という名前が出てきたかといいますと、実は1995年に「人と動物の関係学会」という団体ができておりまして、その影響

を受けて一つのアイデアとして出てきたのです。そのときには、新しい学会の名前は後で検討することになりました。

その1999年の流れを受けて、2000年に「人間・植物関係学会」の準備会を発足させることとなります。この人間・植物関係(学)という名前は、People-Plant Relationshipsを直訳したもので、格別の異論も無く使われることになりました。そして、10月にシンポジウム準備会発足記念シンポジウムが東京で開かれました。この記念シンポジウムでは、河合雅雄先生(兵庫県人と自然の博物館長、京都大学名誉教授)とダイアン・レルフ教授(バージニア工科大学教授)の講演が行われました(人間・植物関係学会, 2001)。お二方とも本学会の発起人として参加してくださいました。そして2001年に人間・植物関係学会が発足しました。本学会は2001年秋に年次大会を開催して以降、研究発表会とシンポジウム(41ページ資料1)を毎年継続していますし、また学会誌を発行しています。さらに2006年からはニューズレターも印刷されています。

その活動の中で特筆すべき出来事は、2003年度に園芸療法士資格制度を整備したことと2004年6月に第8回国際人間・植物シンポジウムを淡路島で開催したことでしょう。

まず後者については、2004年の本学会雑誌第4巻(1・2)と、2008年に発行されたActa Horticulturae no. 970にまとめられていますのでご覧ください。

次に前者の資格制度のことですが、人間・植物関係学会がこれに取り組んだのは次のような理由からでした。前述のように、園芸療法の基礎が人間と植物との関係の理解にあるという認識もありますが、日本の園芸療法を定着、発展させるには、園芸療法にかかわる既存の特別な団体が主導するのではなく、それまでのいきさつとは無関係な団体である本学会が音頭をとり、日本全国の園芸療法関係者が協力して、園芸療法士の力量が誰にでもわかる、開かれた資格制度を整備する必要があると考えられるからです。

この資格制度は、2008年に発足した日本園芸療法学会に移譲することになりました。現在、日本園芸療法学会は、園芸療法士の資格制度をより深化、発展させる方向で努力しています。

今年は本学会が発足してからちょうど10年になりました。学会の成立そしてその後の活動にあたっては、日本だけでなく外国の研究者の支援があったことも忘れてはなりません。たとえば、1990年代から文部省や日本学術振興会の助成を受けて日本に招かれた研究者たち(第6図)が、日本各地で皆さんと語る機会を得て、人間・植物関係の啓発に貢献してくれました。その際、それぞれの地方の方々には快く彼らを受け入れてくださいました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

第8表. 四年制大学で開講された人間・植物関係分野に関連する授業科目(2000—)

授業科目名	単位数	開講初年 <sup>2</sup>	開講大学・学部
園芸文化	2	2000	九州東海大学農学部
園芸療法論	2	2000	南九州大学園芸学部
学校園の緑のすすめ	2	2001	福岡教育大学
人間・植物関係論	2	2002	九州大学農学部
ヒトと植物の関係学	2	2002	恵泉女学院大学人間社会学部
園芸と生活	2	2002	恵泉女学院大学人文学部
園芸芸術入門	2	2002	恵泉女学院大学人文学部
園芸と文化	2	2002	恵泉女学院大学人文学部
園芸と人間形成	2	2003	恵泉女学院大学人文学部
園芸療法論	2	2003	南九州大学健康栄養学部
園芸療法概論	2	2003	広島県立保健福祉大学
園芸療法概論	2	2003	聖カタリナ女子大学
社会園芸学Ⅰ	2	2004	南九州大学園芸学部
社会園芸学Ⅱ	2	2004	南九州大学園芸学部
園芸療法学	2	2004	南九州大学園芸学部
園芸福祉学	2	2004	広島国際大学工学部
.....			
社会園芸学Ⅲ	2	2005	南九州大学園芸学部
花と生活	2	2005	恵泉女学院大学
緑地福祉学	2	2005	千葉大学園芸学部
果樹と生活	2	2007	恵泉女学院大学人間社会学部
庭園文化	2	2007	恵泉女学院大学人間社会学部
園芸療法	2	2007	恵泉女学院大学人間社会学部
バイオセラピー概論	2	2006	東京農業大学農学部
人間植物関係学	2	2006	東京農業大学農学部
園芸療法学	2	2006	東京農業大学農学部
園芸療法学Ⅱ	2	2007	東京農業大学農学部
生き物による作業療法	2	2008	東京農業大学農学部
生き物によるリハビリテーション	2	2008	東京農業大学農学部
園芸療法	2	2006	大阪府崎リハビリテーション大学 リハビリテーション学部
.....			
景観園芸学	2	2007	明治大学農学部
園芸療法論	2	2007	神戸女子大学健康福祉学部
園芸療法論	2	2007	九州保健福祉大学保健学部
園芸療法論	2	2008	金城学院大学社会福祉学部
健康機能植物学	2	2008	千葉大学園芸学部
園芸福祉論	2	2009	日本大学生物資源科学部
園芸療法論	2	2009	千葉大学園芸学部
.....			
園芸の福祉	2	2010	広島文化学園大学社会情報学部
植物セラピー論	2	2010	法政大学生命科学部
植物・人間関係学	2	2010	近畿大学農学部
園芸療法論	2	2010	平安女学院大学生生活福祉学部
植物介在療法学(一)	2	2010	東京農業大学農学部
植物介在療法学(二)	2	2010	東京農業大学農学部
生き物と教育	2	2010	東京農業大学農学部
人間と自然の共生	2	2010	南九州大学人間発達学部
子どもと自然	2	2010	南九州大学人間発達学部
園芸社会学	2	2011	城西国際大学環境社会学部
緑地まちづくり	2	2011	城西国際大学環境社会学部
園芸療法論	2	2011	城西国際大学環境社会学部
家庭菜園	2	2011	城西国際大学環境社会学部
屋上緑化	2	2011	城西国際大学環境社会学部
保育と園芸	2	2011	平安女学院大学子ども学部
園芸療法論	2	2011	南九州大学環境園芸学部
園芸療法論	2	2012	南九州大学人間発達学部

<sup>2</sup> 主にインターネット google の大学案内で調べ、不詳の場合には大学の関係者に問い合わせた。ご協力いただいた関係者の方々にお礼を申し上げます。なお、上記科目にはその後の学部改革に伴って閉講になった科目も含まれている。また、同じ大学の別学部の新設に伴って以前からの同名科目が配置された場合も新しく開講されたものとみなした。

## 8. 人間・植物研究のむずかしさ

実は人間・植物関係研究というのは、非常に難しい面もあります。その一つは、人間にかかわる研究では反復実験をできないものが多いということです。また、場面によっては、個を取り扱うこともあり、その場合にはその個性を尊重しなければなりません。ということは、統計的手法を適用できない話題もあることを意味します。今まで統計学的に扱うことに慣れてきた人、特に自然科学を学んできた人にとっては個、特に人を取り扱うというのはとても苦手です。

いずれにしても、人間とのかかわりを取り扱う研究では、自然科学的手法だけでは対応できないので、人文科学的手法だとか社会科学的手法を取り上げることもありますし、それにある程度慣れるだけでなく、それを理解する考えができるようにならなければなりません。

このような異分野の研究者で構成された本学会では、その違いが学会雑誌に投稿された原稿の査読でも表面化しました。初期の原稿では、査読委員の判定結果(その原稿を学会雑誌に掲載することを認めるかどうか)が正反対になることもしばしばありました。最近では、異分野への理解も深まってきたせいか、以前のように極端な査読判定が出ることは少なくなったようです。

いずれにしてもこの10年の間に異分野を理解できる(というより異分野に対する学識が深まったというのが適切かもしれません。)会員が増えてきたことは学会活動の大きな成果の一つでしょう。

啓発・普及面でも学会活動が貢献していることは、人間・植物関係分野の授業科目を開設する大学が増えていることでもわかります。四年制大学で2000年以降に開講された授業科目を拾い上げてみますと、第8表のような実態でした。2000年以前(第7表)に比べて、人間・植物関係の授業科目が著しく増えてきていることがわかります。

### おわりに

以上、身近な植物とのかかわりやその影響をみてきましたが、それらが市民にはまだ十分に意識・認識されているとはいえません。今後の課題は、これをいかに解決するかということです。そのためには、まず皆さん自身がまず植物とのかかわりとその影響を認識したうえで、それをいかに啓発・普及するかということになります。植物、広くは生きものとかかわりというのは、私たちに癒し、喜び・愉しみ、期待などを与えてくれます。それは人間らしく生きている喜びを表す笑顔に表現されます。これは単に個人のしあわせにとどまらず、社会のしあわせ、そして地球のしあわ

せにつながっていきます。こういうことを念頭において、日常的で身近な人間・植物関係の仕事を進めていただきたいと祈念しています。あらためて、緑あふれる奈良の春日大社で開催された創立10周年記念大会のキャッチフレーズ“No Plant No Life”という言葉を楽しみしめてみようではありませんか。

ご清聴ありがとうございました。

### 引用文献

- 平野秀樹. 1996. 森林理想郷を求めて-美しく小さなまちへ. 中央公論社. 東京.
- Interdisciplinary Research Team of the Office of Consumer Horticulture. 1990. People/Plant Interaction and the role of the Interdisciplinary Research Team of the Office of Consumer Horticulture. Leaflet. 4/10/90.
- Lewis, C. 1979. Healing in the urban environment : A person/plant viewpoint. B.Y. Morrison memorial lecture. Journal of the American Planning Association 45(3) : 330-338.
- Lewis, C. 1996. Green nature human nature - The meaning of plants in our lives. University Illinois Press, Urbana and Chicago, IL.
- 増田絹子・松尾英輔. 2001. 植物に関する色名. 九州大学農学部学芸雑誌 55(2) : 161-168.
- 松尾英輔. 1990a. 「人間の幸福と社会の発展に対する園芸の役割」に関するシンポジウムに参加して その①. グリーン情報 10(8) : 38-39.
- 松尾英輔. 1990b. 「人間の幸福と社会の発展に対する園芸の役割」に関するシンポジウムに参加して その②. グリーン情報 10(9) : 30-31.
- 松尾英輔. 1990c. IRTCH (消費者園芸研究グループ). グリーン情報 10(11) : 58-59.
- 松尾英輔. 1991a. 人間・植物協議会-園芸と人間との幸福をつなぐ. グリーン情報 12(7) : 34-35.
- 松尾英輔. 1991b. 社会園芸学. グリーン情報 12(8) : 52-53.
- 松尾英輔. 1998. 園芸療法を探る-癒しと人間らしさを求めて-. グリーン情報. 名古屋市.
- 松尾英輔. 2002・2003. 園芸療法と園芸福祉-植物とのかかわりで心身の健康, 生活の質の向上を目指す. pp.3-44. 松尾英輔・正山征洋(編著). 植物の不思議パワーを探る-心身の癒しと健康を求めて-. 九州大学出版会. 福岡市.
- 松尾英輔. 2005. 社会園芸学のすすめ-環境・教育・福祉・まちづくり-. 農文協. 東京.
- 松尾英輔. 2007. 園芸はなぜ療法として活用しうるか 人間・植物関係の視点から. 園芸療法研究会西日本10周年記念誌 園芸療法 園芸福祉 10年の

- あゆみ. 園芸療法研究会西日本. 大阪市.
- 松尾英輔. 2009. 園芸から人と植物とのかかわりへー 松下幸之助花の万博記念賞の受賞を機に省みる研究の軌跡ー. 人間・植物関係学会雑誌 9(1): 1-12.
- 波平恵美子. 2001. 生きる力をさがす旅ー子ども世界の文化人類学. 出窓社. 東京.
- 人間・植物関係学会. 2001. 人間・植物関係学会準備会活動報告. 人間・植物関係学会雑誌 1(1): 28.
- 西田正規. 1981. 縄文時代の人間-植物関係ー食料生産の出現過程ー. 国立民族学博物館研究報告 6(2): 234-255.
- Oregon Agriculture in the Classroom Foundation. 2010. The people & plant connection. <http://AITC.oregonstate.edu>
- Shauman, S. 2010. Bloedel reserve. Health care and therapeutic design newsletter, Spring 2010.
- タッジ, C.K. (竹内久美子訳). 2002. 農業は人類の原罪である. 新潮社. 東京.
- 山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究 特別第1号. 植生史研究会.
- 安田喜憲. 1996. 森のこころと文明. 日本放送出版協会. 東京.